生き返る

エゼキエル書三七章一節―一〇節
ローマの信徒への手紙　八章二六節―三〇節
二〇〇九年五月三十一日礼拝説教　秋吉隆雄　牧師

今日は聖霊降臨日です。二千年前の今日、イエス・キリストの弟子たちの群れに聖霊が降りました。その聖霊は、イエス・キリストの生と死、十字架と復活と昇天において起こったすべての出来事の意味を明らかに示してくれました。神は独り子イエス・キリストを遣わし、ガリラヤにおいて生きて働く神様の愛、神の国のリアリティを示されました。しかし、その神様の愛は、時の宗教家たちの前には体制を壊すものとして映りました。彼らは全力を挙げてイエス・キリストを追い詰め、侮辱を加え、苦しみの中で十字架に架けて殺してしまいました。しかし、イエス・キリストはその十字架の死の中から復活されました。聖霊によって、「イエス・キリストの十字架は罪の赦しであり、イエス・キリストの復活は神の永遠の命の啓示であり、イエス・キリストの十字架と復活に人間の救いがある。神からの大いなる是認宣言である。ナザレのイエスこそ、キリスト・救い主である」と示されました。

この時に、イエスを主と信じる群れが形成され、そこに最初の信仰共同体、エルサレム教会が生まれました。聖霊が信仰を呼び起こし、同じ信仰に立つ群れを作り上げたのです。ですから、今日の聖霊降臨日は教会の誕生日です。

聖書では、旧約聖書・新約聖書を貫いて神の霊の働きについて証言しています。そこで今日は、旧約聖書のエゼキエル書から神の霊とは何なのか、どう信じるのか、どう受け止めれば良いのか、ということについて申し上げたいと思います。

霊は、旧約聖書のヘブライ語では「ルーアッハ」と言います。このルーアッハは、「風」あるいは「息」とも訳されます。新約聖書において霊は、ギリシア語で「プニューマ」と言います。聖霊は,「プニューマ」に「ハギオス」(聖)」が加えられたもので、「ハギオス・プニューマ」と言います。しかし、旧約聖書のルーアッハも新約聖書のプニューマも、神の霊として同一のものと理解して構わないと思います。その神の霊とは何であるのか。わたしたちにどのように働いているのか。それが今日の御言葉のテーマであります。

与えられました御言葉、エゼキエル書三七章は、神の霊の根源的な働きを記した箇所です。今、司式者に読んでいただきました。まことにおどろおどろした奇妙な記述です。ですから、何が書いてあるのか、どんな意味なのか、分かりにくいと思います。

エゼキエルという預言者は、きわめて個性的な預言者でした。殊にわたしたち日本人には分かりにくい預言者だと思います。しかし、ここに書かれていることは、霊に対してその意味と力を証した重要な言葉であります。

まず、エゼキエルという預言者は、どのような預言者であったのかということです。彼は紀元前六世紀、南ユダの民に対して語

った預言者であります。彼は大変な学者でありました。学者という意味は、彼以前の南ユダの歴史、また自分より前に活躍した預言者の言葉を的確に知って捉えている人ということであります。歴史学者として優れた能力を持っている人です。エゼキエル書は四八章からなる大部の預言書でありますけれども、「ユダの罪」「諸国民に対する警告」、そして「イスラエルの回復」と、整然とした三部構成で書かれています。この構成は、学者としてのエゼキエルを的確に表しています。

またエゼキエルは、エルサレム神殿に仕える祭司出身の預言者でありました。祭司でありますから、神殿を大事に考えます。それは異郷の偶像礼拝を排して、神の栄光をひたすらに求める信仰であります。彼は「主の言葉がわたしに臨んだ」と言って語り始めますが、その主の言葉は必ず「なる」と、徹底した神中心主義で、神への絶対的な信頼に立って語っています。そしてエゼキエルの特徴は、「霊」と「幻」において語るということです。「霊」と「幻」。これがわれわれ日本人にエゼキエル書を分かりにくくしていると思います。「霊」によって、すなわち人間を超えた神の力でものを見、そして語ります。そこに「幻」が加わっています。まったく奇妙な姿、かたちの「幻」を語りますので、理性的に読む時、混乱させられます。しかし、「霊」と「幻」の中で神の言葉を語る。これがエゼキエル書の特徴で、ここに彼の深い宗教性があります。今日の御言葉は、その典型的な例であります。

いまひとつ押さえておかなければならないことは、彼の時代背

景です。エゼキエルは紀元前五九七年から預言活動を始めています。この年は第一次バビロン捕囚の年に重なります。南ユダは、北にバビロン帝国、南にエジプト帝国という両大国に挟まれた小さな国でありました。ユダは両大国に貢物を納めて、かろうじて国のかたちを保っていたのです。この貢物は、もちろん国民からの税金であります。ですから、貢物は納めたくない。しかし納めざるを得ないわけです。

米ソ冷戦時代、世界の国々はどちらの陣営につくかによって、国の安全保障を確保しようとしてきました。南ユダの場合、北のバビロンにつくか、南のエジプトにつくか、どちらに身を寄せるかに国論は二分していました。エレミヤやエゼキエルは、「バビロンに服せよ」と語りました。彼らは、国際状況を見る時に、バビロンに服するほうが国の安全を保てると判断したのです。しかし南ユダの王様は、エジプトに組してバビロンへの貢物を納めませんでした。そこで、バビロンは大軍を引き連れ、南下してエルサレムを襲ったのです。そして王や有力な人物をバビロンに連行しました。その第一次バビロン捕囚が、紀元前五九七年です。この第一次バビロン捕囚の時に、エゼキエルも捕囚の一人としてバビロンに連行されています。この時に彼は預言者になったのです。

エゼキエル書の一章を開けてください。「エゼキエルの召命」という小見出しが付けられています。「第三十年の四月五日のことである。わたしはケバル川の河畔に住んでいた捕囚の人々の間にいたが、その時天が開かれ、わたしは神の顕現に接した。それは、

ヨヤキン王が捕囚となって第五年の、その月の五日のことであった。カルデアの地ケバル川の河畔で、主の言葉が祭司ブジの子エゼキエルに臨み、また、主の御手が彼の上に臨んだ。」エゼキエルは、バビロン捕囚の一人として今ケバル川に連行されています。その時に天が開けて主の言葉がエゼキエルに臨んだ。すなわち捕囚になったその年に預言者として立たされたということです。他国の捕虜として連行されていく時に、神の言葉を語る預言者として立たされた。これは並のことではありません。彼は神の立場に立って、ユダとエルサレムの罪を弾劾します。偶像礼拝の過ちと、社会的不正義を犯した罪を指摘します。そしてこのことは、当然ユダの崩壊を預言することになります。事実、第一次バビロン捕囚から十年後に、ユダはバビロン軍によって滅ぼされ、第二次バビロン捕囚を受けて国は崩壊していきます。

エゼキエルは、神の高さから時代の罪、荒廃を語ります。ユダ・エルサレムだけではなく、近隣の諸国家・諸国民の退廃堕落を厳しく警告します。神を知り、この方に身を寄せる時に、その人は人間の罪を知らされ、それを語らざるを得ません。これを語ることは本当に苦しく辛いことでありますけれども、預言者はどんな苦境に立っても、神の言葉を真っ直ぐに語らざるを得ません。けれども、預言者は神に立つ者でありますから、決して裁きと絶望的な言葉では終わらないのです。必ず回復を語ります。その回復の預言の象徴が今日の御言葉です。

三七章のエゼキエルは、霊と幻の導きの中で、次のような体験

を語ります。彼はまず神の霊に連れ出されて、ある谷の中に降ろされます。エゼキエルは浮遊体験をしたというわけです。それが体のままであったのか、体を離れてであったのかは分かりません。連れて行かれた谷には、人間の骨がいっぱいあった。神はエゼキエルに谷の周囲を行き巡らせます。人骨が累々と並んでいた。しかもその骨は年月がたって、白色から茶褐色に変色するほどに枯れた骨でありました。この著しく枯れた骨は何であったのか。もちろんエゼキエルが見た幻ですけれども、この幻には意味があるでしょう。バビロンに滅ぼされ、ユダ・エルサレムの民は、捕囚の民としてバビロンに連行されている。エゼキエルと同胞は、今の言葉で言うならば、難民の姿そのものであろうと思われます。国の滅亡を前にして、彼らは力のない偶像に依り頼み、自らだけが生き延びようと悪と罪に走った。この悪と罪に対する、神の厳しい裁きであった。白骨化し、茶褐色に変色するほどの枯れた骨、これはエゼキエルが見た幻でありますけれども、この幻は捕囚の民の姿でありましょう。霊の目、神の目から見た時に、枯れた骨として見えたということでしょう。霊の目、神の目は、上側についている肉をすべて剥がしとって本質を見通します。その本質は、罪のゆえに白骨化した死体として、累々と横たわっている。エゼキエルは、この姿を神様から見せられたのです。

神様はエゼキエルに問いかけます。「人の子エゼキエルよ。これらの骨は生き返ることができるか。」枯れた骨が生き返るかという問い、エゼキエルは答えることができません。彼は「主なる神よ、

あなたのみがご存じです。人間の生と死をつかさどるのはあなた、神様のみです」と答えています。これがエゼキエルの精一杯の応答でした。すると、神様は続けて二つのことを語られます。一つは、枯れた骨に向かって、「主の言葉を聞けと預言せよ」です。もう一つは、「わたしは枯れた骨の中に霊を吹き込む」です。そうすると骨に筋と肉が付き、皮膚が覆って、枯れた骨は生き返る。神はエゼキエルに、神の言葉と神の霊によって、彼ら、著しく枯れた骨、死人は生き返ると言われるのです。

エゼキエルは、神様から命じられたようにまず預言をします。預言とは、神の言葉を語るということです。神の言葉を枯れた骨に向かって語りました。すると、カタカタと音をたてて骨と骨がくっついてきた。そしてその骨の上に筋と肉が生じて、その上を皮膚が覆った。神の言葉によって、枯れた骨が結び合って肉を持つ人間として回復した。けれども、まだその体には霊がなかった。神はエゼキエルに命令します。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る」と言われるのです。エゼキエルは神様に命じられたとおり、霊に預言して語ります。そうすると、神の霊が回復した肉体の中に入って、彼らは生き返った。そして自分の足で立った。それは非常に大きな集団となった。罪の中で滅び去ったユダ・エルサレムの民が、神の霊によって生き返り、回復した。エゼキエルは、このような幻を見たと言っています。

これは幻であって、歴史的事実としてはこのようなことは起こってはいません。これは、あくまでエゼキエルが見た幻です。これは何を意味し、何を語っているか。ある人は、まったく他愛ない、意味のない古代人の宗教的幻想と見るでありましょう。しかしある人は、ここに深い宗教的な真理を見るでありましょう。初めに申しましたように、ユダ・エルサレムはバビロンに滅ぼされ、民は捕囚・奴隷としてバビロンに連行されています。まさに、罪の中に殺された人々の姿を枯れた骨に見たわけです。しかし、エゼキエルはこの骨になった人々もまた、神の言葉と霊によって生き返る。この神の恵みの事実を望み見たのです。そして、それを幻として民に語ったのです。聞いた民は、今われわれは確かに死んでいる、殺されている。けれども神の霊によって、われわれは生き返ることができる。ここにユダの回復の望みを彼らは聞いたでしょう。大切なことは、神の霊を吹き込まれた者は、生き返って自分の足で立つ。このメッセージであります。

創世記の冒頭に、天地創造と人間創造の物語が記されています。人は、土のちりで造られました。人間の素材は土のちりであります。神は、その人間の鼻に命の息、ルーアッハを吹き入れた。その時に人は生きたものとなった。人間は神のルーアッハ、神の霊を吹き込まれた時に生きたものとなる。神の霊が人間を生かす根源的な力なのです。これが聖書の基本的な信仰であります。

今日は聖霊降臨日です。イエス・キリストの弟子たちは聖霊をいただきました。この時に彼らは、ナザレのイエスはキリスト・

救い主であると信じるようになました。ナザレのイエスをキリスト・主と信じる。その時に人は神を見出して、神と霊の交流をし、生きるものとなる。この奇跡が聖霊降臨日の今日起こったのです。そしてこの奇跡は、二千年代、そしてわたしたちの教会においても起こっています。パウロは、この聖霊において起こる奇跡についてローマの信徒への手紙で次のように書いています。

新約聖書ローマ書八章をもう一度ご覧いただきたいと思います。八章二六節から読んでみます。「同様に、『霊』も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、『霊』自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、『霊』の思いが何であるかを知っておられます。『霊』は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。」これがパウロが語る霊の働きであります。霊は弱いわたしたちを助けてくださる。どう祈ったらよいか分からない時に、霊はその人の心の中のすべてを神様に執り成してくださる。神様と結び付けてくださる。そして、霊は万事が益となるように

わたしたちの間で働いてくださる。神はわたしたちを御子イエス・キリストに似たものになるように召し出してくださっている。そして、神様はわたしたちを「義」として、「良し」として神の栄光をお与えになる。栄光は、わたしたちが神の子イエス・キリストに似た者になるという意味です。聖霊は、神の義を与え、すべてを益になるように、わたしたちの間で働いている。パウロは、霊はこのように働くと語っています。

わたしたちは自分の罪のゆえに、また、この社会の罪の狭間で殺されて白骨の死体になって転がされているのではないか。しかし、聖霊降臨によって聖霊が与えられている。神に向かって生き返る。そして自分の足で立つ。そのようなものとしてわたしたちは召し出されています。エゼキエルが見た幻は、今のわたしたちの間でも同じように起こっている恵みの現実であります。これを信じて、これを望んで生きるというのが聖霊に与るというわたしたちの幸いであります。今日、聖霊降臨日、この出来事をわたしたちに与えられた救いとして受け止めて、神様に感謝したいと思います。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉、心から感謝いたします。聖書を読む時に、人間がいかに罪深い者であるかを示されます。しかし、それを遥かに超えて神様の赦しの大きな力を示されます。そのことを思う時、本当にうれしい思いにさせられます。神様、わたしたちは本当に死んでしまったような者でありましたけれども、あなたの聖霊に与って生き返って、あなたに向かって生きるように召し出さ

れていることを信じて感謝いたします。ひたすらあなたの憐れみに与って、あなたに向かう信仰生活を全うさせてくださいますように心から祈ります。そのことの中に、わたしたちの確かな救いがあります。この救いを感謝し、受け止めながら生きることができますように、信仰生活を導いてください。教会に招かれていることを感謝いたします。どうぞ互いに受け入れ合い、助け合い、愛し合ってあなたの御国の姿を、聖霊によって生かされている姿を現すことができますように教会を顧みてください。群れの中で様々な困難を覚えている兄弟姉妹たちがおられます。あなたがすべて知っておられます。どうぞ慰め励まし、悲しみと苦しみを乗り越える力を、聖霊ご自身の力によってお示しくださいますように祈ります。神様、わたしたちは日本の国の上に、また世界の上に、あなたの愛と平和と正義が実現することを心から願っています。自分ひとりで立つのではなくて、共に生きることがどんなにうれしいことであるかをみんなで知り合って、その世界を目指すことができますように、この世界を神様どうぞ祝福してください。今日から始まります一週間、聖霊に支えられてあなたに向かう信仰生活を全うさせてください。心からなる祈り、キリストの御名によって御前にお捧げ申し上げます。アーメン

引用文献

聖書　新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讃美歌２１、日本基督教団出版局、一九九七年四月